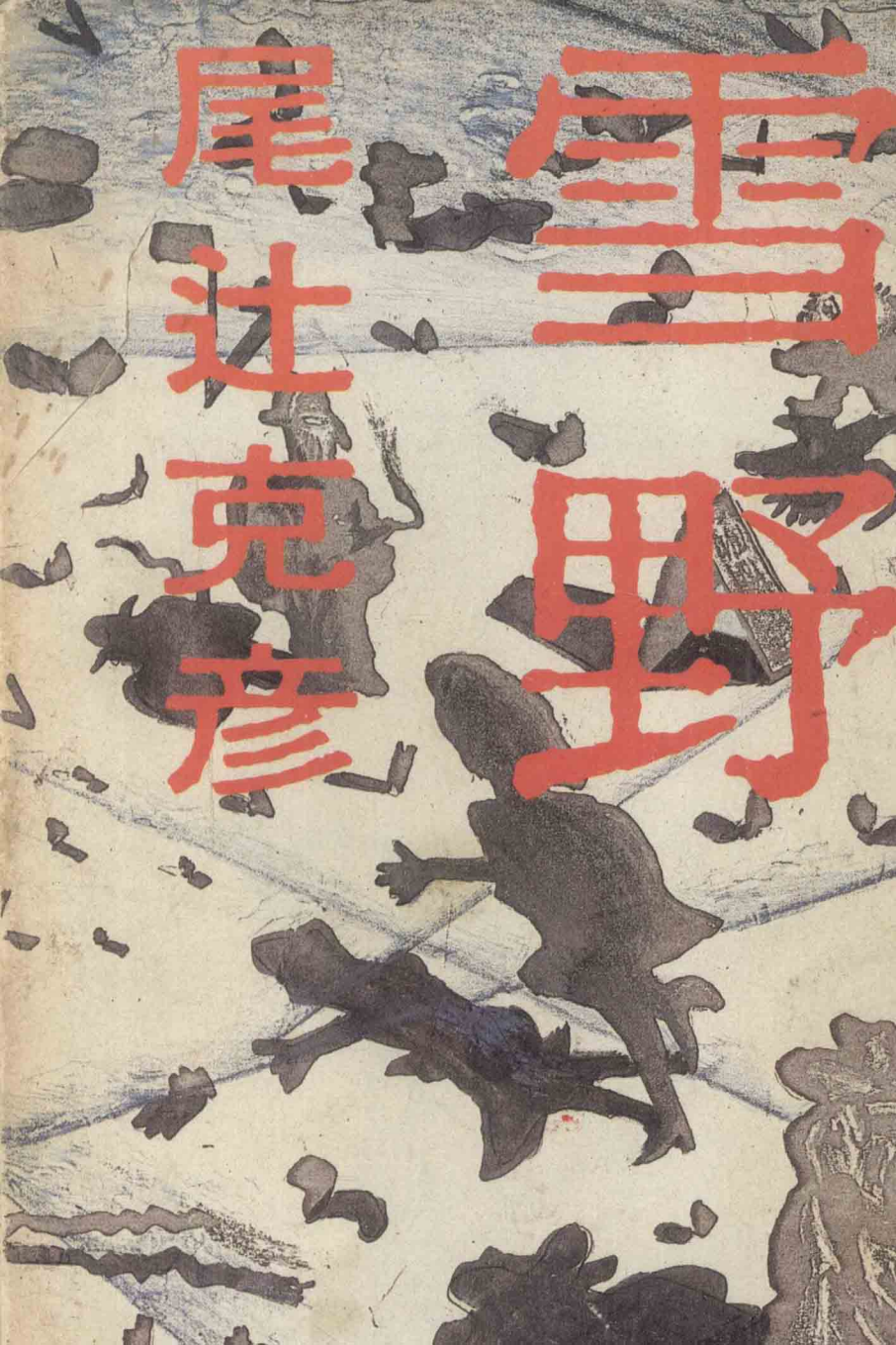


雪野
尾辻克彦



野

尾辻克彦



文藝春秋

著者略歴

本名、赤瀬川克彦。昭和十二年、横浜市に生まる。武蔵野美術大学中途退学。現在、「美学校」講師、イラストレーター、文筆業など活動は多彩。昭和五四年、「肌ざわり」で中央公論新人賞を受賞、昭和五六年、「父が消えた」で第八四回芥川賞を受賞。作品集として『父が消えた』『肌ざわり』、ほかにエッセイ集として『整理前の玩具箱』『少年とオブジェ』『優柔不断読本』などがある。

雪（ゆきの）野

昭和五十八年 六月二十日 第一刷

定価 一三〇〇円

著者 おつじ 尾辻 克彦

発行者 西永 達夫

発行所 株式会社 文藝春秋

東京都千代田区紀尾井町三一二三
電話 (〇三) 二六五一二二一

印刷所 共同印刷

製本所 加藤製本

万一、落丁乱丁の場合は

お取替え致します

雪

(ゆきの)

野

装画 山崎 英介
装丁 藤枝リユウジ

横浜では雪は見なかったな。横浜には一年半から二年ぐらいいた。一歳半から二歳ぐらいまで。横浜で生れたのだ。地球儀のちよつと上の方だ。日本列島の真ん中あたり。

横浜の記憶といえ、橋を渡った記憶ぐらいだ。赤い橋だ。いや肌色をした橋だった。いや肌色というより肉色といった方が正しいと思う。橋の両側が肉色をしている。両側に服がぼろぼろに破れて肉体の各部をあらわにした人体が、ずらりと並んでいたのだ。

その橋は乞食が大勢いるので有名だったというのは、ずいぶんあとになってから聞いた。その話がまた時間をさかのぼって、その橋の上の小さな頭にもぐり込んだのかもしれない。直径十二センチぐらい。一歳半から二歳ぐらいの小さな頭だ。私は母親に手を引かれてその橋を渡っていた。歩いて行くと、両側の肉の列がゆらゆらと波打った。乞食たちが順番に手

を出したり、順番におじぎをしたり、順番にもぞもぞと坐り直したりしていたのかもしれない。私はその真ん中を通っていた。両側の肉色がじわじわと触って来そうで、向うまで渡り切れるかどうか心配だった。それが私の生れてはじめての記憶だ。空気が新鮮だった。両側に並ぶ肉色は、朝日なのか夕日なのか、横からの強い光に照らされて、鮮やかに発色していた。あまりにも鮮やかだった。私の目玉が、まだこの世で出来たての新品のレンズだったからだろうか。

横浜のあと芦屋に引越したけど、芦屋ではかなりの記憶が生れた。二階建の家のベランダ、玄関のドアの真鍮の把手、広いグラウンドのような道路、その向い側に建っている旅館屋ぶりの旅館、その前にいつも馬がつながれていて、その馬の腹の下をイタズラ小僧がぐぐり抜けて、大人たちに叱られていた。

芦屋のあと門司へ引越して、門司の家の前の道路に雪が降り積っていた。

門司の家のまわりには坂道がたくさんあった。家の前は高い崖に石段があり、その上の方にまだ家があったりした。私のいる家の裏も崖になっていて、下の方に屋根が見えた。隣の家の女中さんが、崖の下の怪し気な男に毛糸の束を持ってもらって、毛糸を長く伸ばし、何か冗談をいい合いながら上の方でクルクルと巻き取っていた。私はその下にいる男が悪人に見えて、隣の女中さんがいまにも騙されるのではないかと心配した。それがいつも崖とい

っしょに想い出される。もう三、四歳になっていただろうか。

そういう坂のある町に雪が降り積ったので、近所の子供たちは竹や木の板でスキーみたいなものを作って遊んでいた。私はまだ小さいので見ていただけだった。

それから大分に引越した。大分では雪ではなく雨の印象がある。いやその前に水だな。本州の端から九州の端まで渡るのに船に乗った。はじめて鉄の船に乗って、広い水の上を渡った。船の鉄板が陸から離れてユラリと浮いていた。何か不安定な、飛行機の長い翼の上に立っているようだった。私の足を詰めた靴の下の方にある海の水が、物凄く遠く、頭のずーっと上の方に感じられた。門司の陸に着いたときのことはもう覚えていない。記憶に残るのは、どうもそのシリーズの最初だけだ。

大分で父に連れられて新しく住む家を見に行ったとき、雨上がりで、道路の土の上にツルリとした水溜りがいくつか出来ていた。その家はまだ建築中の二階家だった。結局その家には住まなかった。なかなか住む家が決らなくて、しばらく、何ヶ月かの間、家族みんなで市内のひなびた旅館に泊っていた。兄弟たちはその旅館から新しい学校へ行っていた。事情はよくわからないけど、旅館から学校へ行くというのは、いま思うと妙な感じだ。

そのときは兄弟五人で、一番上の姉などは、この大分に来るまでに四回も転校をしていた。だけど成績はいつも一番か二番だったという。きっと頭が良かったのだろう。ほかのみんな

も成績はいい方で、兄や姉たちはよく級長などをやっていた。そのときはまだ末っ子だった私は、級長はやらなかった。絶対にやらなかった。学校でいつもは発言が少ないくせに、選挙で級長にされそうになると慌てて発言をして、ほかの人の名前をどんどん上げた。

級長だけではない。勉強でもそうだった。たとえば体操の時間、運動会が近づいてダンスの練習をしていた。私はすぐに出来るようになったのだけど、みんななかなかリズムがとれない。先生はいらいらして、

「しょうがないな。ちよつと、誰か、ちゃんと出来る人……」

と言って、みんなにダンスをつづけさせながら、出来る人を探しはじめた。みんなの前でお手本としてやらされるのだ。私は、

（これはマズイ）

と思い、先生の目が自分の方に向いてきたとき、オットトトト……、という感じで、わざとリズムを間違えてみせた。みんなの不器用さにいらいらしていた先生の目は、みんなを見るのと同じ軽蔑のマナコになって私のところを通り過ぎたので、ホッとした。そのくらい人前に出るのが恥ずかしくて、それが人に褒められる嬉しさよりも先行していた。

絵の時間には何度か褒められて張り出されたので、自分は絵が好きなのではなく上手なんだな、ということがわかった。それまでは好きだということしかわからなかった。家の中

では両親や兄弟たちが「上手だ、上手だ」と褒めてくれたのだけど、その「上手だ」というのが実際にはどういふことかわからなかった。それが小学校に行つて外のみんなの絵とくらべられると、その上手だということがよくわかった。なるほど、自分は絵が上手だ、と思つた。

市の写生大会で賞状をもらつたりもした。だけど当時の上手な絵というのは、いまの絵とはだいぶ違う。いまは表現が独創的で面白いとかいつて褒められたりするのだけど、そのころは「表現」などという言葉は、たぶん大人の方でもあまり使われていなかったと思う。そのころはあくまでも写實的に上手な絵ということで、いまからくらべたらずいぶん硬い絵のことである。自分で想い出しても、硬い絵だったなあとと思う。そのころ教室での図画の時間は、お手本を見てそれを画用紙に模写するというふうだった。そんな絵で上手だといわれていたのだから、考えたら、あまり自慢できることでもないわけである。

でも自分ではそのとき、そういう写真主義に忠実だった。家で姉たちの西洋美術全集などを見ては、人間の手でこんなに本物そっくりに絵が描けるものかと思ひ、自分もそのくらいに描いてみたいと思つた。そんな腕が欲しいと思つた。これは精巧な飛行機の模型が欲しいというのと、凄く似ている。目の前に、そっくりなものが欲しいのである。

一つ覚えているエピソードがある。小学校の一年生か二年生のときだ。学校で護国神社へ

写生に行った。みんなそれぞれに散らばり、私は石段の下から写生をした。まず鳥居を描き、石段を描き、その上に神殿を描いた。最後にその石段のところで参拝している軍人の後姿を描いたのだけど、それが何かしら感じが出ない。描いた人物が写実的に見えなくて、いわゆる子供の絵のようになってしまう。足と背中と頭はちゃんと後姿に描けるのだけど、手がダメなのだ。

その日出来上がらない人は家で仕上げてくるようにといわれた。私は家に帰ってから、その後向きの人物の手を何度も描き直した。右手と左手にきちんと指を五本ずつ描いた。ところがいくらきちんと描いても、どうしてもそれが変になる。両手をピタリと揃えたキヲツケの姿勢にならない。それでがっかりしながら、自分で実際に何度もキヲツケの格好をしてみた。両手を下にピンと伸ばして、ピタリと体の両側につける。これだ。この姿勢を後から描いているのだ。そう考えて、私は全身が手の平のようになり、全身がピンと立てた板のようになり、気が付いた。いままで指を五本描いたのがいけなかった。手には指が五本あるけど、キヲツケを後から見ると五本は見えない。ピタリと揃えたキヲツケを後から見ると、小指が一本見えるだけだ。そうだ。これだ。指一本の厚みだけが見えるのだ。なあるほど。

私は大胆にも指四本を削り取って、後向きの軍人の袖から下を、一本の細長い棒のような手に描いた。そうしたらピタリと、それはキヲツケの後姿になったのである。私は痛快な気持ちになった。たったそれだけのことだけど、人に褒められたのより嬉しかった。私はその自分の発見に、自分の目が一段と力強く感じられるようになった。

そうやって、自分で絵を描くのは好きだったし、それに付けたして、それを上手だと褒められるのには慣れていた。戦時中であるから、飛行機や軍艦の絵をよく描いた。雑誌の写真などを見て描くんだけど、それを近所の大人たちに欲しいといわれた。そういう大人たちが重なったりして、どうやら私の絵をもらう順番ができていたようだった。私はどんどん描いて順番にあげた。日曜日に縁側で絵を描いていると、近所の女学生みたいなおねえさんが見に來たりした。その人も「順番」の人のようだった。それが成人の異性であることに何故か気が持が動揺したりしたけど、絵を描く手もとを見られて上がったりはしなかった。体操の時間には、わざと間違えてまで人前に出ないようにするほどなのに、絵を描くことに関しては恥ずかしくなかった。みんなに見られても、もうそういうものだと思っていたし、描くことに熱中できた。

うちの縁側でもそうだったけど、小学校でも休み時間に、ときどき私の机に人の輪が出来ていた。同級生の生徒たちは、思い思いにあれを描け、これを描けと注文を出した。私は、

そんなのは描けないよ、とかいいながら、鉛筆で何かころと描いていた。

終戦の年に、私は三年生だった。終戦ではいろいろなことが変った。それまでは死ぬつもりで緊張していた世の中が、急に死なないことになり、力がゆるんだようになって、何となく騒がしくなった。緊張が解けながら、あちこちでトランプの混ぜ合わせが起きているようだった。学校でも先生が変ったり、教科書が変ったり、言葉づかいも少し変ったような気がした。時間表も変った。道路の交通規則も右になったり左になったりした。学区も変ったのか、新しく何人か転校生がはいって来た。近くの小学校が一つ無くなってしまったのだというようなことも聞いた。

その日も私は、学校の休み時間に絵を描いて遊んでいた。机のまわりにはやはり何となく人の輪が出来ていた。ところがその人の輪が、その日はときどき動いているようだった。何かいつもより変った話し声が多いような気がする。何となく見ると、教室の中にもう一つの人の輪が出来ているようだった。あ、あそこにも何か珍しいものがあるんだな、と思った。何か珍しい本でもあってめくっているのかもしれない、と思った。だけど本でもないらしい。本よりももっと、何か人の輪が、目の前のものに睦目している、という感じなのだ。こちらの人の輪から、一人二人偵察に行つて来たりしている。

「誰じゃ」

「いや誰か知らん」

「向うはポパイを描いちよる」

「うまいど」

などと言う声が聞える。誰かやはり絵を描いているらしい。私は誰だろうかと思った。いままでにあまりそういう光景を見たことがない。どんな絵だろうと思った。自分の絵が一段落してから、どれどれと行ってみた。人の輪の隙間から机をのぞくと、誰か、紙を縦に使ってポパイの絵を描いている。海があつて、島があつて、椰子の木があつて、その下にパイプをくわえたポパイがしゃがんでいる。ポパイはマンガで見たことがある。でもそれが凄くうまい。大人が描いたみたいだった。そのころはまだ子供なので、大人みたい、というのにやはり弱い。私は飛行機や軍艦や写生みたいなのはよく描いていたけど、ポパイのようなマンガふうの絵はあまり描いたことがなかった。だから珍しくてじっと見ていた。カルチュアシヨック、というほどではないにしても、ほほ……、という感じで見ていた。

その生徒はずーっと頭を上げずにポパイを描いている。やはりいままでに見たことのない転校生のようなのである。まだはじめてなので、顔を上げにくいのかもしれない、と思った。だけれどみんなに見られて顔も上げずにどんどん描いているので、そのうちポパイは出来上がった。もう描くところはほとんどない。

「ほー」

「うまいのう」

「ポパイっち、映画があるんど」

「あ、知っちゃる」

「見てえの」

とか言いながら、人の輪はくずれて、みんなバラバラと校庭へ行った。過密な時間が少し解けて、ちよつと空いた時間になった。転校生が顔を上げると、その机の上のポパイの絵にどこか似ていた。目かもしれないと思った。キョロンとしている。髪かもしれないと思った。坊主刈りだけど、額の右のちようどいい位置に、ウェーヴみたいなクセがあった。それが坊主刈りにしていてもちよつとわかった。春なのに、皮膚は日に焼けたように黒っぽかった。名前を聞くとユキノと言った。

「どげん字書くん？」

と私は聞いた。

「白い雪に、野原の野……」

「ふーん」

濃い皮膚の色に雪野という名前が、土の上にこぼしたお砂糖のようだった。

そのころに描いた絵を、私はずーっとあとで名古屋に引越してから、伊勢湾台風の大洪水で全部海に流してしまった。古い擦り切れた柳行李にぎっしりと入れてあったのだけど、堤防に穴を開けて来た海水は屋根の軒近くまでせり上がり、押入れの柳行李はスッポリと海水に沈んでしまった。そのときは青年時代で、

「いやあ、これで身軽になってセイセイしたよ」

などと思っていたけど、やはりいま考えると惜しいことをしたと思う。水をかぶったあともちろんと水の底から拾い上げて、一枚一枚ひろげて乾かしておけばよかったと後悔している。その中でいちばん古いのは、やはり飛行機の絵だ。戦闘機が急降下して雲に突っ込まんとしているところの鉛筆画で、そのころ近所の大人たちの希望する順番に持っていかれながら、それだけはあげるのが惜しくてとっておいた一枚だった。自分では雲の描写と飛行機のガラス窓の描写が気に入っていた。

病気のときの自画像もあった。黄疸になったのだ。たしか小学校の一年生のときだと思う。お正月に毎年新年会をやっていた。町内の大人と子供が全員、町中で一番広い部屋のある小野さんの家集って、ご馳走を食べて、ゲームをやって、隠し芸をやって、一晚中浮き浮き

として過す。その一年の中のいちばん楽しい日を前にして、黄疽になり、私はがっくりと哀れになった。家のものがみんな出かけてガランとした部屋の中で、布団から顔だけ出して、自分の悲運を嘆いていた。まだ病氣になったばかりのときだからよけいにそうだった。でもその黄疽が、お正月を過ぎたあととずいぶん長くつづいたと思う。あんまり長くて飽きてしまい、そのしめつとした布団の上に起き上がって自画像を描いた。久し振りに鏡を持って来てもらって見たら、こりゃあずいぶん病氣の顔になったと、しげしげと眺め入ってしまった。それまでも自画像は何度か描いたけど、その病氣の自画像はふだんと違う黄疽のやつれが、目の光や口もとのふくらみにはっきりと描かれていて、自分でも氣に入っていた。絵というものは凄いと思った。

二年生の夏休みの宿題のスケッチブックも一冊あった。一日に一枚ずつの写生をやりとげたのだ。朝顔の絵、蟬の抜殻の絵、玄關の横の庭石の絵。近所のお寺の一本松の絵もあった。その一本松は上級生たちがよく写生していて、私も真似して写生してみたら凄くうまく描けた。でもあまり上級生みたいになく描けてきたので、途中からドキドキしてしまい、絵の四分の一ぐらいが凄くぎこちない下手くそなものになってしまった。こういうクセは大人になっても変らないようだ。うまく描ければ描けるほど途中からドキドキしてきて、硬くなって、絵が壊れてしまう。人間というのは妙な生き物だと思った。絵を描いたりするのは